小説にみる在日コリアンの「市民権」について

齊藤　綾華

序論：グローバリゼーションと日本

グローバリゼーションとは、ヒト、モノ、カネ、そして情報の諸活動が国境を越え、国家、社会、人間の関係が密になり、相互に作用することを指す。グローバリゼーションの始まりは、第二次世界大戦後の近代化である。モデルとなっていたのは西洋産業社会を構築するアメリカであり、「非西洋社会にとっては、西洋近代の模倣こそが、近代化の意味であった」(宮永 2000:3)。このように、グローバリゼーションの始まりは経済的な活動によるものであり、情報やイメージの移動は活発化した。しかし、この動きによってグローバリゼーションという言葉は、文化の再定義を含む、より多面的で複合的なものとして機能するようになった。西洋社会の模倣による、経済的・文化的な統合を目指す動きは、文化を統合するどころか、多種多様な民族の存在を明らかにした。グローバリゼーションは、文化的に均質な国家という神話をよりいっそう非現実的なものにし、各国の多数派に対しても多様性をもっと受け容れるよう強いてきたと、カナダの政治学者であるキムリッカは指摘する。マイノリティだけではなく、受け容れていくマジョリティに対しても、グローバリゼーションは影響を及ぼすのである。

近年、多民族との共生を目指す動きは世界的な広がりを見せ、「多文化共生」という言葉も身近なものとなっているが、この「多文化」という言葉には、多様な形態の文化的多元性が含まれている。マイノリティが政治共同体に編入される仕方についても、植民地化などの政治的な事象から自発的な移住まで、様々である。国家に文化的多様性が生ずる理由は、一つの国家のなかに二つ以上の民族が並存していることにある (キムリッカ 1998:15)。二つ以上の民族を含む国家は「国民国家 (nation state)」ではなく「多民族国家 (multination state)」となるが、その実態は、異なる民族の歴史性を反映し複雑である。

一般的に「多民族国家」と認識されているオーストラリアでは、1970 年代半ばより多文化主義政策が導入された。この政策は、多種多様な民族がそれぞれの伝統文化や言語などを維持し共存していくための「文化統合」を目指すものであり、「政治的、社会的、経済的、

文化的、そして言語的不平等をなくして国民社会の統合を維持しようとするイデオロギーであり、具体的な一群の政策の指導原理」である（有光 2003:97)。移民の国であり、先住民族アボリジニーを含んだ国家であるオーストラリアにおいては、必然的な流れであったといえる。

日本においても在日外国人は存在している。とりわけ在日コリアンは、1910 年の韓国併合、第二次世界大戦などを機に増加し、現在では六世の時代となっている。グローバル化に伴い、多文化共生に向けた第一歩を踏み出しているようにも見える日本であるが、そのような動きにも関わらず未だ「多民族社会」の形成に至らない理由として挙げられるのが、日本は「単一民族国家」であるという考え方が根付いている点である。この考え方は、「異なるもの」に対して同化や排除を強いる歴史を作ってきた。しかし、日本に生まれ、日本で育った在日コリアンがほとんどである今日、彼らを取り巻く環境は在日コリアン一世の時代とは大きく変化していると考えられる。

「在日」という言葉は、日本への滞在は一時的なものであり、いずれは母国へ戻るという意味を含んでいる。そのため、一世のアイデンティティは母国の韓国であったといえる。しかし、それ以降、在日コリアンの「日本化」は進み、彼らのアイデンティティの所在は日本でも韓国（朝鮮）でもなく、その中間に位置するようになったと考えられる。

このような文化を持つ人々を、インドの文学者であるホミ・K・バーバは「文化の中間者」と位置づける。中間者の文化を表す道具として、バーバは小説をあげている。小説は、語り手の存在を通し、多面的な視点を描くことが可能であるという。一般的に小説には、読者を惹きつけるためにパロディ化などのフィクション的要素が含まれる。また、作者自身の考えが偏って表れてしまう危険性もある。それでも、バーバは「事実に抗した語り」は自由な市民生活の記号であると述べる。この「語り」とは、事実と異なる虚構の世界を描きだす文学、とりわけ小説を指し、中間者が自由に表現される場であると指摘する。また、小説は大衆に向けた発言でもあるため、マジョリティに対しても影響を及ぼす可能性がある。小説は中間文化の表象となり、私たちが彼らを理解するためのツールとなり得ると考えられる。では、このような複雑な中間者の実態は、小説に表れているのだろうか。本論文では、在日朝鮮人文学を例に挙げ、小説が日本における中間文化をどのように表しているのかを考察する。

第一章では、バーバの理論を使用し、中間文化の位置づけを試みる。また、中間者が表現されるという文学について、その特徴を示す。第二章では、在日朝鮮人文学について示

し、梁石日、李良枝、金城一紀の作品について概要を述べる。第三章では、第二章で挙げた作品を基に、小説がどのように中間文化を表すのかを考察する。

第１章：「文化の中間者」とその表象―ホミ・K・バーバの示す「語り」の可能性―

国家内に文化的な多様性が生じる一つの原因は、一つの国家のなかに二つ以上の民族が並存していることにある。ここでいう「民族（nation)」とは、制度化がほぼ十分に行きわたり、一定の領域や伝統的居住地に居住し、独自の言語と文化を共有する、歴史的に形成されてきた共同体を意味している(キムリッカ 1998:15-16)。このような多民族国家では、小さい方の文化のことをマイノリティと位置づける。

キムリッカはマイノリティから「移民」の存在を区別することの必要性を述べる。移民集団は自らの伝統的居住区に居住しているのではなく、「依然として支配的な（諸）文化の公的諸制度に参加し、支配的な（諸）言語を話して」おり、「民族」とは言えないからである（キムリッカ 1998:21)。

そこで、キムリッカはマイノリティのことを「民族的マイノリティ」と「エスニック集団」に分類する。民族的マイノリティは伝統的に居住し、その土地に文化を築いてきている。そのため、マジョリティの文化と並ぶ別個の社会としての存在を望み、自治や自己統治を求めるし、その可能性を持つ。一方、エスニック集団は自文化を離れ、別の社会に移ってきた集団のことである。彼らの移住は、様々な背景（強制連行、出稼ぎなど）があるにせよ自発的なものとして捉えられる。そのため、伝統的居住地や伝統文化を奪われた民族的マイノリティとは異なるのである。また、彼らは自己統治ではなく「エスニック・アイデンティティ」の承認を求める傾向にある。「主流社会の制度や法律を修正し、それが種々の文化的差異をよりいっそう包容するものとなるようにすること」が、彼らにとって重要なのである（キムリッカ 1998:15)。

本論文では、「民族」を日本人、「エスニック集団」を在日コリアンと位置づける。在日コリアンは、自ら望んだ移住ではなかったとしても、「移民」であるという事実の下「支配的な（諸）文化＝日本文化」の制度に従い、「支配的な（諸）言語＝日本語」を話さざるを得なかった。このような「支配的」事象は、時間が経過するにつれてエスニック集団と「他者」との関係を曖昧なものにする。

関根（2000）は、人にとって文化や言語は生きていくための道具・手段であり、必要ならば他の文化・言語を取り入れるものであると述べる。文化はこのように可変で雑種的なものだとしても、一度「文化」や「民族」が形成されてしまい、そのもとで生まれ長い間暮らした人々は、その時々の文化に対して強い愛着を感じる（関根 2000:33)。すると、たとえ「他者」である民族の文化であったとしても、時間の経過とともに「自らのアイデンティティ形成の材料として身について」しまうのである（関根 2000:33)。

二世以降の在日コリアンは、日本で生まれ育ち、日本文化を持つ。民族学校での教育を受けていたとしても、日々の生活の中でも日本語は欠かせないツールである。このようにして、「他者」である日本の文化が自らのアイデンティティの一部として身についていく。「日本」という社会環境で生活を営む在日朝鮮人は、完全に日本社会に溶け込めないところに、「朝鮮」の文化が根強く生きていながら、長い歳月の中で、日本文化に染まる部分も大きくなっている（陳 2010:384)。この「日本文化に染まる部分」が、在日朝鮮人の心の中に強ければ強いほど、韓国文化を異文化視する意識が鮮明になる（陳 2010:384)。二世よりも三世、三世よりも四世が、「他者」である日本の文化をより取り入れるようになり、日本が身近なものとなる。一方で、祖国の韓国がより遠い存在となるのである。

インドの文学者であるホミ・K・バーバは、T・S・エリオットの著書を引用し、このようなエスニック集団の存在を「文化の中間者のようなもの」と位置づけた。「中間者」はマジョリティと不可解なほど似ているが、異なる存在であるという。

このような中間的な存在の位置付けについて、バーバは実体験を基に述べている。バーバは「パーシィ民族」というインドの中でも少数民族の出身である。パーシィは文化的にも芸術的にも伝統を持たず、パーシィ独自の神学や古典的小説も存在しない。民族としての伝統も独自の文化も持たないことは、一般的には文化の弱点と捉えられがちである。しかしバーバは、伝統文化の中に自分の歴史を構築していく必要が無く、より解放的な自己構築のために有効なものであると考えていたという。このような「文化卓越」を拒み、二項対立のレトリックに支配されない環境は、多様な民族を含む現代の国家において、重要な意識を生むと考えられる。

「中間者」の特徴としてあげられるのが、空間的距離の間に創造されることである。多文化主義を推し進めていくと、文化と文化の裂け目に空間が生まれるのだという。この空間について、バーバはルネ・グリーンの会話を引用する。

私は建築物を文字通り言及される対象として扱った。屋根裏や、ボイラー室、階段の吹き抜けを、より高いものと低いもの、天国と地獄といった幾つかの二項区分を表すために使いながら。吹き抜けは境界的な空間、上と下の領域を繋ぐものとなり、私はそれに黒さと白さを表す表示板で注を付けたのだ(バーバ 2005:6)。

バーバは、建築物における吹き抜けのような差異の空間は、文化が交雑する可能性を持ち、二項対立に収束することを防ぐことができると指摘する。二つの文化が行き来する通り道のような空間は、階層秩序、優劣を持たない差異を示すことができるのである。このような特殊な差異は、同時代に同じ文化、「空間」の中で共生しているという私たちの感覚を脅かす。文化が交雑して存在することは、私的なものと公的なもの、過去と現在、内面的なものと社会的なものを、親密なものとして結ぶ。そのため、「中間的」な空間では、二項対立が不可能となるのである。

このように、二項対立を持たずに存在する「中間地点の空間」は、「差異」という対立を超え、新たな主体性を生み出す可能性を持っているという。バーバは、「この「一部」文化、この〈部分的〉文化は、汚されてはいるが諸文化間を繋ぐ組織片である」とし、中間に生きる者の多い今日の多文化社会において、新たな役割を果たしうることを示す（バーバ 2001:97)。

しかし、この空間の維持は非常に困難なものであるとバーバは指摘する。グローバル化の進む中、国民国家という言葉は、次々と境界を越えていく移民の存在に焦点を合わせ「ポスト国民国家」と呼ばれるようになった。しかし、その実態は、未だに国民国家を完全には脱していない「孵化しつつある変化の時期」なのである。「とても繊細で壊れやすい性質を持ち、両面価値的な矛盾を孕んだ」状況は、自己のアイデンティティと他者との関係をどのように捉えていくのかが曖昧になり、再び対立する危険を孕んでいると考えられる(バーバ 2004:225)。

バーバは、近代における境界の問題は、国民と空間の間に起こる両面価値的（アンビヴァレント）な時間性の中に生まれることであると指摘する。同じ「空間」の中で共生をしているという感覚があったとしても、個々の文化の持つ「時間性」は異なるのである。その時間性は歴史的背景などによるものであり、過去と現在という二項対立を引き起こす可能性がある。文化が交雑し、二項対立が不可能である「空間」の概念との間には矛盾が存在する。

例えば、二世以降の在日コリアンは他者が自己の一部となっており、「中間者」の要素が

強い。中間者の持つ歴史的背景などの時間性は、文化の衝突などにより二項対立を引き起こす危険がある。しかし一方で、日本という他者であり自己である文化との間に生まれた空間は、二項対立を回避し、優越のある「差異」から脱却する可能性を持っているのである。バーバの示す「中間者」の実態は、こうしたアンビヴァレンスさを容認する複雑なものなのである。

バーバはこうした複雑な状況を理解するための道具として「文学的語り」を示す。語りは「突然過去と現在とが交差し連関する」ものであり「〈無時間性〉への跳躍」を可能にするという（バーバ 2004:225)。この「語り」の特徴として考えられるのが(1)自己認識、(2)多面的な視点、(3)時代の指標の三点である。

(1)の自己認識であるが、これは中間者自身が自己認識をするために用いられることである。文学には、無意識のうちに形作られた国民全体の内的性格が表れる一方で、「他者性」を通じて自分を認識するための手段となり得ると、バーバは指摘する。

> 後期近代に生きてそのような歴史を共有する私たちは、自らの語る権利を獲得し直すことによって、初めてそうした不安と恐怖に満ちた過去に向き合い、自らは部分的にしか理解することができない曖昧さに満ちた現在に直面することができるのではないでしょうか？（バーバ 2004:228)

文学の語りは、中間者自身、作者自身の持つ過去と向き合うことを可能にし、自己のアイデンティティ理解に繋がると考えられる。

(2)の多面的視点は、小説に示される語り手（登場人物）の言葉が作者自身の声であることを指す。小説に登場する語り手の口を通すことで、より多面的な視点からひとつのものごとを描き出すことが可能になる。ロシアの文学者ミハイル・バフチンは、小説の働きについてこう述べる。

> 作者は自己を、そして語り手およびその言葉遣いと言語(それは多かれ少なかれ、客体的なものとして示される）だけでなく、叙述の対象にも向けられている自己の視点、つまり、語り手の視点とは異なる自己の視点を実現する（バフチン 1996:108)。

作者は、語り手を通し、より客観的な視点から個々の多面的な時間性を示す。自己から離れた位置から「自己」を描くことで、多様な表現につながるのである。

(3)の時代の指標は、文学の中に、その時代性が表れることを指す。作品が描かれた時代背景や、時代の移行に伴う葛藤や模索が表現されると考えられる。

> 文学の語りこそは、私たち自身の時代の指標です。それは移行を理解するための道具であり、その時代の古さと新しさが混在した「二重の運命」への挑戦であり、「新しい」自由が古い不正義を刷新して、〈倫理的な〉理解をひらくための不可欠な手段なのです。(バーバ 2004:225)

文学の語りは、異なる時間性を持つ個々の文化を、作品という一つの空間に描き出す。その時代が表現されることで、描かれている中間者の実態を理解するだけではなく、私たち自身が時代の変化を理解するための道具にもなり得るのである。

このように、「語り」には様々な働きがあることがわかる。ではこのような特徴は、実態としてどのように表出しているのだろうか。

第２章：在日朝鮮人文学とその実態―梁石日、李良枝、金城一紀を例に―

ごく一般的にいえば、「在日朝鮮人（在日コリアン）が」「日本語で」「“民族的アイデンティティの危機の中での、彼らの苦悩と抵抗”を」表現した文学というようにまとめることができるかもしれない（林 2003:83)。また黄（2004）は、在日文学は特殊な政治的な時代状況から生まれた文学であり、政治的アイデンティティと民族的葛藤を持っていると述べる。その葛藤は時代とともに変化するが、特に黄が「本格的な『在日』世代」と表現し、在日問題の始まりと位置づけているのが在日二世である。在日一世代と違って生まれつき日本語を話す彼らは、母語である韓国語との間での言語の葛藤があり、また民族的な政治体制の混乱を激しく経験した世代であるといえる。関根（2000）が述べるように、時間の経過とともに「他者」のアイデンティティが自分のものとして身についてしまう。二世以降の在日世代は、日本という「他者」の文化が自分の中に入り込み、自分の一部となっている。一方で祖国に戻ろうとしても、日本人化した在日コリアンは「本国の人々からも異

なる人々とみなされはじめる」のである（関根 2000:28)。

このように、二つの文化の狭間に存在する在日コリアンは、複雑な文化を持った中間者であるといえる。では、このような複雑な様相は、バーバの指摘するように実態として文学に表れるのだろうか。

本章では在日朝鮮人文学の中から、梁石日（ヤン ソギル）（1936-）の『族譜の果て』(1988)、李良枝（イヤンジ）（1955-1992）の『由熙（ユヒ）』(1989)、金城一紀（1968-）の『ＧＯ』(2000）の三作品をあげる。

まず、梁石日である。彼は在日コリアン二世の作家で、幼い頃に戦争を経験し、朝鮮人集落で成長した。彼は自身の経験を通して、在日対する差別や厳しい生活、帰化の問題について描いている。

次にあげる李良枝は、梁石日と同様に在日コリアン二世の作家である。しかし、朝鮮人が一人も住んでいない村の出身であり、幼い頃に日本へ帰化している。また、両親の「日本人化」教育により、日本舞踊や琴など、日本の文化について深く学んでいる。祖国への留学を機に、自身のアイデンティティについて悩むようになる。留学生活における様々な葛藤を、小説に描き出している。

最後にあげる金城一紀は在日コリアン三世の作家である。彼は自らを「コリアン・ジャパニーズ」と位置づけるなど、新たな在日の在り方を模索している世代であるといえる。

本章ではまず、今回扱う三作品の概要を述べる。

２-１．梁石日『族譜の果て』

主人公は、在日朝鮮人の高泰人（コオテイン）である。若くして印刷会社を設立し、莫大な資本を投資して工場と居宅を建て、ドイツ製の印刷機を導入するなど、短期間に規模を拡大した。しかし、全ては借金の塊であり、初仕事を前に経営は火の車であった。泰人は、銀行からの融資を受けるために接待を繰り返し、散財を続ける。

十五人の従業員と課長の戸室とともに操業初日を迎えた泰人は、ようやく操業に漕ぎ着けた喜びで満たされる。しかし、そんな気分も束の間、専務の後藤だけは出勤していないことを戸室に指摘される。後藤はこの道三十年のベテランで、某大手マッチ会社から引き抜いてきた人物であった。泰人は後藤のキャリアを生かすためにと設備投資に莫大な金をつぎ込む。資金は父の高俊平（コオチュンピョン）と従兄の陽生（ヤンセン）に頼った。多額の借金を抱えてようやく迎え入れた後藤であったが勤務態度は悪く、赤字は続く一方であった。

ある日、泰人は道端で黄太明（ファンテミョン）・李楽成（イーナクソン）・崔民生（チェミンセン）に出会う。彼らは、十一年前に起こったＮ爆破事件を共に経験した同胞であった。Ｎ爆破事件は、同胞が経営していたＮ金属工業所が、米軍の下請けであることに異を唱えた者たちのデモであった。しかし、多くの同胞が警察に捕まってしまう。留置所に入れられた泰人は一週間後に突然釈放されたが、太明・楽成・民生の三人は一般政治犯として尋問を受け続けていた。その後泰人は、爆破事件の首謀者として崔民生が逮捕されたという事実を知る。その他にも、政府の陰謀により同胞八人が拘留されることとなり、六年後には有罪判決が下されたのだった。

久しぶりに同胞と出会った泰人は、三人と酒を共にする。当時は四人全員が左翼系組織の同志であったが、今となっては崔民生だけが現役の活動家であった。民生は、差別や日本から「与えられている自由」に異を唱え、在日の生きる権利を勝ち取ることを目指していた。在日同胞の子供は日本人化し、日本への帰化者も増えるだろうと民生は語る。一方で楽成は、大衆がよりよい生活を求めるのは当然のことだと話し、太明は近々日本に帰化するつもりだと打ち明ける。民生は裏切りに似た感情を抱いて反論するが、太明は「チョウセン」という言葉にまとわりつく全てが嫌いなのだと話す。しかし帰化したとしても、日本社会の中では自分自身を隠蔽して生活しなければならないのが現実であった。

泰人は、その後も資金繰りに奔走するが、最後は後藤に裏切られ従業員と金を失い、廃業に追い込まれる。その後ブローカーの仕事を始めた泰人は、韓国の土地に投資しないかと知人から持ちかけられる。泰人は韓国へ渡ることを悩むが、行くことを決める。帰り道、睡魔や酒で意識が朦朧とする中、泰人は車のアクセルを踏み込む。それはまるで、彼の前に立ちはだかる夢と現実の壁に風穴を開けるかのようであった。

２-２．李良枝『由熙』

この物語の登場人物は、韓国へと留学している在日韓国人の主人公「由熙」、由熙の下宿先の「叔母」、その姪である「私」の三人であり、すべて「私」の視点から描かれている。

ある日、私の住む家に不動産屋から、在日同胞の留学生が下宿先を探しているという連絡が入る。家は、Ｓ大学からは遠いトンネ（町）にあるにも関わらず、この辺りが気に入ったという。Ｓ大学は叔父の母校であったこともあり、叔母は一度部屋を見に来るようにと言う。そして、私と叔母は、由熙と出会うことになる。

由熙は小柄で、大学生とは思えないほど童顔であった。人見知りのためなのか、会話も仕草もぎこちなく、いつもどこか緊張している印象を受けた。

由熙は何度も下宿先を変えていた。叔母は現在の下宿先について話を聞こうとするが、由熙は困った顔をし、泣き出しそうになってしまう。叔母は話題を変え、日本にいる家族のことや、日本での生活について、由熙に話しかける。由熙は、解放されたように安心した表情を浮かべ、今までよりも流暢に話し始める。しかし、日本での同胞の差別についての話題を出されると、視線を落とし、顔が強張ってしまうのだった。叔母は、叔父と同じ S 大学に属しているということや、由熙のあどけなさを気に入り、部屋を貸すことに決める。しかし私は、由熙の会話に疑問を抱く。言語学を専攻しているのにも関わらず、由熙の発音はあまりにも不確かで、文法にも間違いが見受けられていたのだった。

由熙は私たちの家へと引っ越してきた。私は由熙と家具を買いに出かける。街に出ると、由熙は何かに耐えるような様子でうつむいてしまう。バスに乗っていると、物売りの男が携帯用のナイフを持って乗り込み、私たちの座席の近くで喋り始める。私にとっては見慣れた光景であったが、由熙は耳を塞ぎながら泣き出してしまう。私は、由熙のことを苦しめているものは何だったのかと考える。いつも通りの、自分の母国の光景がそうさせたように思えてきた私は、この出来事が起こったのは、まるで自分の責任であったように感じるようになる。

その後、由熙はこの家での生活に慣れるにつれ、韓国に対する不満を口にすることが多くなる。私は、自分のありかを求めようとする由熙の思いを感じ、放っておけないという気持ちを強く持っていた。由熙が韓国に慣れることが出来るようにと、不満に対して弁解していた私であったが、由熙の意地悪げな口調に反発し「在日同胞は、日本人以上に韓国を蔑んでいる」と怒鳴ってしまう。由熙は私の前で、泣きながらノートに韓国語を書きなぐり始める。そこには、韓国を母国だと言うことが出来ないという葛藤が綴られていた。母国語に対する葛藤があった由熙だが、一方で、由熙はしばしば韓国の伝統楽器である大芩(テグム)の散調(サンジョ)を好んで聴いていた。由熙は、自分にとっての母国語は大芩であると話す。

結局由熙は、韓国に馴染めず日本に帰国することを選ぶ。由熙が中退すると言い出してから、私は彼女と口論を繰り返していた。私は由熙に、韓国に居続けることが重要であることと、彼女が韓国の一面しか見ていないことを指摘していた。しかし由熙は、学校でも、町でも、みんなが話している韓国語催涙弾と同じように聞こえてならないと話し、家を出て行ってしまう。

由熙は私に、空港から電話をかけてくる。最後の会話で、部屋にある茶封筒を預かってほしいと頼まれていた私は、由熙の部屋へ向かう。茶封筒には「우리나라（母国）」と記されていた。中には分厚いレポート用紙の束が入っており、全てに日本語が書き連ねられていた。私は日本語が読めなかった。しかし、それらの日本語は息をしているように、さまざまな感情を感じさせるものであった。私は、あれほど身近にいて、姉妹のようになれると思っていた由熙が遠い存在であったことに気付く。

叔母は私に、同じような経験が叔父にもあったことを話す。叔父が生まれ育ったトンネは、反日感情が強い場所であり、日本に良い感情を持つことはできなかった。日本に滞在していても、テレビから聞こえてくる日本語の響きが嫌で仕方がなかったのだという。心の奥底にある感情が、そうさせたのかもしれないと、叔母は話す。由熙もテレビを見ることを嫌っていた。そんな由熙が日本に帰って最初にすることは、きっとテレビを見ることだろうと、私と叔母は笑う。

２-３．金城一紀『ＧＯ』

主人公の杉原は、在日コリアン一世の父と、二世の母を持つ在日朝鮮人。朝鮮学校に通い、ヒネクレ者の悪ガキに育った。ある日父は、突然ハワイに行きたいと言い出す。しかし、北朝鮮はアメリカと国交がないため、国籍を朝鮮から韓国へと変えなければならなかった。

元々父は戦時中、日本人であった。朝鮮（韓国）は、日本の植民地であったからである。終戦後、父は在日朝鮮人となり、在日朝鮮人が所属している「総連」で活動していた。父は仲間のためにと必死に活動し多くの寄付もしていたが、総連の目はいつも北朝鮮に向いており、在日朝鮮人には向いていなかった。国籍取得のために、父は在日韓国人が所属している「民団」に相談をし、幹部に多くの金を払って韓国籍を取得した。父と母は韓国籍を手にし、ハワイへと旅立った。杉原は、国籍を変えることは承諾したが、ハワイには行かず、日本の高校を受験する費用にあてることに決める。

日本の高校に進学した杉原は、本名ではなく通名で通うようにと言われ、素直に受け入れる。杉原は、民族名に誇りを持っていた訳でもなかった。なぜなら、日本の高校への進学を表明してから、「民族反逆者」として教師たちからひどいいじめを受けるようになっていたからである。民族反逆者である杉原は、民族にとことん反抗するつもりだった。

そんな杉原にとっての高校での唯一の友人は、加藤であった。父親が暴力団の幹部である加藤は、生粋の悪ガキだった。

ある日、杉原は加藤の誕生日パーティに誘われる。そこで桜井という少女に出会い、互いに惹かれあうようになる。次の日曜日に会えないかと桜井は尋ねるが、杉原は約束があるといって断る。その相手は、朝鮮学校からの親友、正一（ジョンイル）であった。

正一は在日韓国人の父と、日本人の母の間に生まれた在日コリアンで、朝鮮学校の同級生であった。朝鮮学校では、日本語や数学、物理などの他に、朝鮮語と朝鮮の歴史、伝説的な指導者〈金日成〉について教えられていた。杉原は民族学校のことを「教団」のようだと感じるようになる。「教団」は嫌いだったが、それでも通っていた理由は友達がいることだった。小中一貫教育を受けていたこともあり、友達は血を分けた兄弟のようなものであった。そうした友情以上のものを芽生えさせるきっかけは、「差別」であった。しかし、朝鮮籍から韓国籍に変え、更に日本の高校へ進学することを宣言した杉原は、「民族反逆者だ」と言われ教師から暴力を受ける。その時、杉原を庇ったのが正一であった。今まで一言も交わしたことがなかった二人であったが、この事を機に友人となる。正一はそのまま民族高校に進学した。日本の高校に進学した杉原は、親しかった友達からも「よそ者」にされていたが、正一との関係は切れず、最低でもひと月に一度は会う仲であった。

日曜日、杉原と正一いつものように喫茶店で近況を話し、自分の読んだ本などを薦めあった。受験の話になると、正一は民族学校の教師を目指すつもりだと話す。正一は、民族学校という「教団」は様々な意味での弱者にとって受け皿となる役割を持っているという。彼は近所の子供からいじめられていたことがあった。しかし、民族学校に通うようになってから、そういったいじめが平気になった。後輩たちがより広い場所に出て行けるように、民族学校の教師になりたいのだと、正一は話す。

杉原にとってこの日は、正一と会った最後の日となってしまった。正一は小さな誤解のために日本人高校生に刺され、命を落としてしまったのである。親友を失いショックを受けた杉原は、桜井に精神的な助けを求めようとする。そして勇気を出し、自分が在日であることを桜井に告げる。しかし彼女は、杉原のことを受け入れることができなくなってしまう。彼女の父親は、「中国人・韓国人の血は汚い」と、彼女に言い続けていたのである。杉原は桜井に、日本人のことをどうやって区別するのかと問う。答えることができない桜井に対して杉原は、日本人には中国や朝鮮から渡来した人々の血が混じっていることを伝える。しかし、理屈では分かっていても、杉原のことが恐いと話す。杉原は、桜井の元を

去る。

桜井との連絡を絶ってから、杉原は亡くなった正一の遺言である受験のために、勉強を続ける。ある日、宮本という在日コリアンのクラスメイトに話しかけられる。彼らは在日の若者を集め、権利のための勉強や活動を行っていた。その活動に参加しないかと誘われるが、杉原はそれを断る。「国籍」や「国」に縛られたくないという気持ちが強かったのである。

その日の夜、酔った父を迎えに行った杉原は、弱音を吐く父の姿を目にする。その姿を見たくない杉原は、父親たちのような在日一世の時代は終わったのだと言い放ち、父を怒らせる。二人はタクシーを降りて殴りあうが、杉原は元ボクサーの父に勝つことはできなかった。再びタクシーに乗り込んだあと、父は自分たちの時代が終わったという杉原の言葉を認める。そして、この国はこれからもっと変わっていくし、どんどん外に目を向けて生きていくべきだと話す。

その後、受験勉強を続ける杉原の元に、桜井から連絡が入る。桜井と会った杉原は、在日コリアンに対する日本人の偏見について憤りを露わにする。黙って聞いていた桜井であったが、最後は杉原のことを、国籍などは関係なく一人の個人として受け入れられるようになる。

次章では、この三作品を元に、在日朝鮮人文学における特徴を考察する。

第３章：文学が示す中間文化

まずは『族譜の果て』である。この作品では、朝鮮人のおかれる生活の厳しさや差別が描かれている。主人公の高泰人（高村泰人）は、印刷工場を経営する青年である。しかし、資金繰りに奔走する日々を過ごし、最後には専務の後藤に裏切られてしまう。後藤は、朝鮮人であり年下の泰人のことが気に入らなかった。後藤は、泰人以外の従業員を呼び集め、教唆する。

おまえら日本人やろ。日本人がチョーセン人になめられてどないすんねん。おま

えら根性ないのか。人さまの国に住みながら大きな面しやがって。（中略）日本人はな、大昔から万世一系いうてまざり気のない単一民族なんや。

日本人の後藤は、自分より年下の人間が社長であるということよりも、泰人が「チョーセン人」であることに憤りを感じている。「日本人は単一民族である」という後藤の主張にもみられるように、朝鮮人は外の者であって、「他者」であるという意識が強い。その「他者」が権利を求めることや出世することを、彼らは許せないのである。もちろん、在日から見ても日本人は「他者」であるが、そのような日本との関係の他に、帰化に対する在日同胞同士の葛藤もあるようだ。

その後泰人は在日同胞の崔民生、李楽成、黄太明と再会するが、朝鮮人のあり方について議論になってしまう。現役の活動家である民生は、在日の意識に対して話す。

われわれの意識はなしくずしに崩壊していくだろう。（中略）在日同胞の子弟は日本人化していくだろう。日本人に帰化していく在日同胞は年々増加していくだろう。

在日同胞が「韓国人（朝鮮人）」として生きていくのではなく、時代や周囲の環境に流され、他者である日本人と共に生きていくことに対し、異を唱えているのである。このような意識は、帰化問題につながる。近々帰化しようと考えているという太明の発言に、民生は反論する。

それでも昔、同じ釜の飯を喰った同志のいうことか。（中略）かりにだ、日本に帰化したとして、君を日本人社会が受け容れてくれると思っているのかね。

在日コリアンにとって、厳しい時代を生き抜くためには、同胞同士の団結が必要不可欠であった。そのため、日本という「他者」の一員として生きることは、同胞からの差別の対象にもなり得るのである。また、単一民族思想の強い日本が在日を受け容れることは、困難であった。しかし、楽成は太明を擁護し、大衆がよりよい生活を求めるのは当然であると主張する。

このように太明と楽成、民生の発言は正反対であるが、この三人は梁石日自身の表れな

のである。

作中に出てくる「N爆破事件」では、日本政府の陰謀によって無実の罪を着せられる在日朝鮮人の姿が描かれる。これは歴史背景を基にした日本人に対する嫌悪感の表れであり、バーバのいう、時間性による二項対立の表れであるといえる。一方で、帰化同胞の気持ちも描く。彼は、日本社会に同化することを拒むと同時に、帰化する同胞の気持ちも理解できるのである。この三人の話をただ聞いているのが主人公の泰人であるが、彼は、客観的に日本を見つめる梁石日自身の姿なのではないだろうか。

梁石日は小説の存在をこう話す。

> 私が書きたいのは、虚構の中の真実である。闇の中の実態を小説という虚構の世界で描くことであった。なぜなら、真実は誰も見たことがないからである。(「日経トレンディネット 時代の仕掛け人 第45回（前編)」)

虚構の世界で、梁石日は自分自身の姿を多面的に表現した。また、梁石日は小説を、知らない世界を知るための道具としても位置づけている。ただのフィクション化で終わらせるのではなく、虚構の中に真実を含むことで、多方面から客観的に真実を描き出すことが可能となる。このような働きを持つ語りを、バーバは「事実に抗する語り」と位置づけ、私たちの通常の位置性を解体することが可能になると指摘する。自己の置かれている立場から離れることによって、自分の過去に向き合い、直面することが可能になるのである。

次に、李良枝の『由熙』である。この作品は、祖国での留学生活を続けていく上で浮かび上がってきた疑問の「一つの段階的な結論」であるという。在日同胞にとっての母国とは何か。二つの国の間に生きる者の精神的主体性はどこに確立されるのか。こうした疑問を整理し消化するために、彼女はこの作品を書いたのである。李良枝は自身の講演で、幼いころの朝鮮に対する気持ちを語っている。

> あからさまにいじめられたとか辱められたとかいう、直接の経験もありません。けれども、なぜそうなったのかはっきりしないまま、自分が「朝鮮人」だということを一つの大きな欠点みたいに感じるようになり、否定的なこととして受け止め始めました。これは、「目に見えない差別」と表現するしかないものかもしれません（「わたしにとっての母国と日本」）

李良枝は、「韓国」に全く触れることのない環境で育った。しかし、時々訪ねていく親戚の韓国人が住む町や風景を受け入れることができず、次第に恥ずかしいもの、隠さねばならないものと感じるようになったという。「異なる」と感じたものを受け容れられないという点で、彼女は日本特有の単一民族思想を持っている。日本人に囲まれ、日本の文化を学んできた彼女にとって、祖国は「他者」のような存在であったのだろう。

しかし、高校時代の教師が語った「日本の歴史は、朝鮮の歴史なくしては語れない」という言葉によって、彼女は「朝鮮」を恥ずかしいものという意識が変わったという。在日同胞の歴史を知るようになると、彼女は朝鮮という民族に対して愛着を持つようになる。その後、彼女は韓国の琴である伽倻琴(カヤグム)に出会う。幼い頃から日本の琴を習っていた彼女にとって、「琴」は文化の象徴のようなものであったと考えられる。彼女は、伽倻琴を通じて、より韓国に対する思いを強く抱くようになり、伽倻琴の上達こそが祖国に対する愛の証明であるとすら考えていたという。伽倻琴を学ぶために祖国の韓国へ留学した彼女の体験は『由熙』の中に表れている。由熙は母国を知りたい気持ちから留学を決意するが、実際の母国と自身のイメージとのギャップに悩む。韓国の伝統楽器である大芩(テグム)に興味を持つが、一方で母国のことを「우리나라(ウリナラ)」と呼ぶことができない。「우리나라(ウリナラ)」とは、直訳すると「私たちの国」となるが、由熙は韓国のことを「우리나라(ウリナラ)」と言い切ることに抵抗があるのだ。由熙は、泣きながら「私」に訴える。

우리나라(ウリナラ)　(母国)
사랑할 수 없습니다(サランハル スー オプスムニダ)　(愛することができません)
대금(テグム)　좋아요(チョワヨ)　(大芩 好きです)
대금소리는(テクムソリヌン)　우리말입니다(ウリマリムニダ)　(大芩は母語(ウリマル)です)

由熙は、周囲の人間が話す韓国語が、まるで催涙弾のようだという。彼女は祖国である韓国の文化に惹かれても、母国語である「韓国語」を受け入れることが出来なかったのである。このように、母国語と母語との狭間で悩むことは、李良枝自身にもあったようである。

名分上もしくは観念の上では、韓国語は母国語であり、私のアイデンティティの

中心に位置すべき言葉であることに間違いはありません。けれども実際には、母国語である韓国語はどこまでも外国語であり、異国の言葉としてしか受け入れることができなかったのです（「わたしにとっての母国と日本」）

韓国語を母国語として受け入れたい気持ちはあるが、日本で生活している在日コリアンにとって韓国語は「外国語」となっているのである。こうした母国語と母語についての葛藤は、在日同胞の誰もが抱えていると、李良枝は述べる。それでも、『由熙』を書くことで、自分自身のアイデンティティを確かめていたのである。

在日二世作家に強く見られるのは、第一章で示した(1)自己認識の要素である。自身のおかれた状況を、小説という虚構の世界に描き出すことによって、一歩引いた地点から自己を認識していたと考えられる。また、(2)に示した多面的な視点により、語り手を利用した客観的な自己認識につなげていると考えられる。

このような実態から変化しているのが、在日三世である。在日三世代になると、文学の対象が在日韓国人の政治的・民族的アイデンティティの問題より個人の問題に移されて、普遍的な実存の問題と個人の趣向にこだわる（黄 2004:186)。その中でも、民族的アイデンティティの問題を取り上げている作家の一人が、金城一紀である。彼は自身のことを「コリアン・ジャパニーズ」と位置づけるなど、新しい「在日」のあり方を模索している作家である。

本章で扱った『ＧＯ』に見られるのは、自己認識としての役割だけではなく、一章に示した(3)時代の指標という要素である。

主人公の杉原は、在日コリアンである。両親の影響により朝鮮籍から韓国籍に変え、民族学校から日本の高校へと進学する。これらの出来事は、韓国人でも日本人でもないという、彼の意識を表している。国籍を変えることに抵抗がない杉原は、アイデンティティを「国」に求めていないのである。

ある日、杉原は在日のクラスメイトである宮本に、在日のための活動に参加しないかと誘われるが断る。そして、国籍が関係ないなら何故変えないのか、と問われた杉原は、こう答える。

俺が国籍を変えないのは、もうこれ以上、国なんてものに新しく組み込まれたり、取り込まれたり、締めつけられたりされるのが嫌だからだ。もうこれ以上、大き

なものに帰属してる、なんて感覚を抱えながら生きてくのは、まっぴらごめんなんだよ。

このような、国籍にとらわれない考え方を作ったのは、杉原の父である。ハワイに行きたいという理由で韓国籍に変えた父であったが、これは杉原が「在日」という位置づけにとらわれることがないようにと、自らの行動で示したものである。より自由な選択が可能であると理解している杉原は、国籍や既存の「在日」という位置づけに縛られない生き方を望んでいるのである。

一方で、宮本の活動自体には理解を示す。

おまえがやろうとしてることがどうのこうのって問題じゃないんだ。正しいことだと思うし、意義のあることだとも思う。でも、俺は誰ともつるまないで、おまえたちと同じことをやりたいと思ってるんだ。

自由な選択が可能になっているからこそ、杉原も宮本も、現在の在日のあり方を変えなければならないという意識を持っているのである。集団として活動しようとする宮本に対し、杉原は個人として何かを変えたいと話す。また、親友である正一との間にも考え方の違いが見られるが、現状に対して何かを変えようとする姿勢は共通している。朝鮮学校を否定する杉原に対し、正一はその必要性を話す。一方で、朝鮮学校をより開けた空間にすることを目指している。民族として、マイノリティとしてのよりどころは必要だとしながらも、現状を変える必要性も感じているのである。彼らが「何かを変えなければならない」と感じている点は、自己のアイデンティティを自由に位置付けられるという可能性を含んでいることによって表れると考えられる。これは時代の移行を示したものであり、新しいアイデンティティの模索を表したものでもあるのではないだろうか。

また、時代の指標として働く点としてあげられるのが、日本人の女友達である桜井と杉原が和解することである。彼女は、杉原が在日であることを知り、受け容れることができなくなる。しかし、国籍ではなく杉原自身に好意を抱いていたことに気付くのである。杉原は、日本人への憤りや「在日」として社会に固定されることに対する反感を、桜井にぶつける。

俺を狭いところに押し込めるのはやめてくれ。俺は俺なんだ。いや、俺は俺であることもいやなんだよ。俺は俺であることからも解放されたいんだ。（中略）おまえらは国家とか土地とか肩書きとか因襲とか伝統とか文化とかに縛られたまま、死んでいくんだ。ざまあみろ。俺はそんなもの初めから持ってねえから、どこにだって行けるぞ。

こうした杉原の思いに対して、桜井は「もう杉原が何人（なにじん）だってかまわない」と答え、杉原のことを国籍ではなく個人として受け容れる。現代におけるステレオタイプ的に位置づけられた「在日」を脱し、新たな立ち位置を受容する桜井の行動は、新たな時代の指標であり、金城自身が抱く「新しい在日」のビジョンを示したものであると考えられる。彼は在日文学について、こう話す。

これまでの在日文学の閉鎖的な感じが好きではないんです。アイデンティティの危機があったときに在日文学を集中して読んだんですが、救われなかった。僕と同じような経験をする若い人が読んで、在日の問題から自由になれるようなものを書いていきたいんです。（「金城一紀ロングインタビュー」）

自分自身が救われなかったというのは、環境の変化に伴い、「在日」について新たな位置づけが必要となっていたためであると考えられる。金城は文学を通し、既存の「在日」を脱することを提言しているのである。また、文学という社会的な発言を通すことにより、マジョリティに対しても「新しいマイノリティのあり方」を示し、中間文化の理解につなげようとしているのではないだろうか。

バーバは、「事実に抗した語り」は、あり得たかもしれない過去の歴史を、未来の可能性へと繋げるプロジェクトであると述べる。在日三世は、韓国（朝鮮）と距離が遠くなっている分、より客観的に過去を見つめ、日本における多文化社会の可能性を示すことができるのである。

以上のように、文学の「語り」に表れる特徴は、在日二世と三世では異なる。それは、在日を取り巻く環境の変化の表れであり、マジョリティに対する自分自身の位置づけの変化によるものである。日本に生まれ育った在日世代は、日本がより近く韓国がより遠い。複雑な環境の中で自己を認識しようとする点は共通しているが、より新しい位置づけを試

みる点が三世作家の特徴であることがわかる。また、時代の指標としての役割も担っており、中間文化を理解するための手段として有効なものであると考えられる。

考察

小説に表れる複数の語り手からは、作者自身の多面的な視点が見受けられる。『族譜の果て』では、日本に対して嫌悪感を持つ者と、生活しやすくするための「帰化」を容認する者の、二つの立場が描かれており、「在日」をどこに位置づけるかという梁石日自身の揺らぎが表れていると考えられる。『由熙』では、自分のよりどころを祖国の韓国に求めようとするが、母国語を受け容れることのできない在日コリアンの姿が描かれている。一方で、韓国人の立場から在日コリアンという存在を見ることで、より多面的な視点が生まれている。『ＧＯ』では、国籍にとらわれない一方で、様々な方法により「新しい在日」のあり方を模索する人々が表れている。また、在日自身のマジョリティの位置づけに対する、世代ごとの変化も映し出されている。

このように、小説は中間者の文化を反映しうると考えられる。しかし、小説による「語り」が中間文化の表象として機能していても、中間文化の理解につなげるための手段として利用するのは難しい。その理由のひとつに、在日朝鮮人文学の存在が薄れているという点がある。

民族的アイデンティティの問題を表現している作品は減少している。三世の作家においては、民族についてとりあげない作品も多い。また、次の時代を担う在日作家がいないのが現実である。このように、時間が経過するにつれて、在日朝鮮人文学というジャンル分けが困難になる。バーバの述べたように、中間文化の維持の難しさは、文学にも表れているのである。

また、在日朝鮮人文学を受け取るマジョリティが、中間文化を意識することの難しさも、指摘しなければならない。今日の在日朝鮮人文学は、「在日」という存在をよりポジティブに捉える方法を模索している。そのひとつがフィクション性を利用した自由な表現であるが、在日三世の作品に見られるフィクション性はエンターテイメントの要素が強く、在日朝鮮人文学の意義である「中間文化の表象」という側面は失われつつあると考えられる。「在日朝鮮人文学」としてではなく、ひとつの「日本文学」としての位置づけとなりつつ

あり、中間文化の表象として機能しにくいのである。小説の中に在日の持つ中間者的な空間を見出すことは、受け手に強いることのできない問題として残ってしまう。

このように、在日朝鮮人文学というのは過渡的なものとしてその機能を失いつつあることが明らかになった。しかし、在日という中間的な空間が消失する可能性は薄い。金城一紀は自身のことを「コリアン・ジャパニーズ」と位置づける。しかし在日という中間的な空間は、常に変化しながら存在し続けているため、このような概念が日本に根付くことは困難であると考えられる。

在日という中間者は文学を通して、国籍などにとらわれない、より自由な立場を創造した。彼らは、一歩ひいた地点から、客観的に日本を認識していると考えられる。それは、彼ら自身が多文化を意識せざるを得ない「中間文化」という空間に位置していたためである。つまり、彼らは日本における多文化社会の実態や必要性について認識しており、その上で新たな自己のあり方を模索しているのである。「中間者」としての在日を理解することは、在日自身に限らず、多文化時代における我々日本人のアイデンティティを探る上で必要となるだろう。

引用・参考文献

有光保江（2003）『オーストラリアのアイデンティティ　文学にみるその模索と変容』東京大学出版社

イアン・ワット　藤田永祐（訳）『小説の勃興』南雲堂

井上達夫（1999）『他者への自由―公共性の哲学としてのリベラリズム―』創文社 現代自由学芸業書

李良枝　磯貝治良、黒古一夫（編）（1993）『李良枝』講談社

李良枝（1989）『由熙』講談社

李良枝（1985）「わたしにとっての母国と日本」『刻』講談社　pp. 185-227

ウィル・キムリッカ　角田猛之、石山文彦、山崎康仕（監訳）（1998）『多文化時代の市民権―マイノリティの権利と自由主義―』晃洋書房

小熊英二（1995）『単一民族神話の起源　〈日本人〉の自画像の系譜』新曜社

加藤秀俊（2004)『多文化共生のジレンマ　グローバリゼーションの中の日本』明石書店
金城一紀（2000)『ＧＯ』講談社
金泰明（2004)『マイノリティの権利と普遍的人権概念の研究―多文化的市民権と在日コリアン―』株式会社トランスビュー
佐竹眞明（2011)『在日外国人と多文化共生――地域コミュニティの視点から』明石書店
関根政美（2000)『多文化主義社会の到来』朝日新聞社
野村進（1996)『コリアン世界の旅』講談社
原尻英樹（1998)『「在日」としてのコリアン』講談社
福岡安則（1993)『在日韓国・朝鮮人―若い世代のアイデンティティ―』中央公論社
ホミ・Ｋ・バーバ（2001)「文化の中間者」スチュアート・ホール、ポール・ドゥ・ゲイ（編）柿沼敏江、林完枝、松畑強、佐復秀樹（訳）　宇波彰（監訳)『カルチュラル・アイデンティティの諸問題　誰がアイデンティティを必要とするのか？』大村書店 pp. 95-109
ホミ・K・バーバ　本橋哲也、正木恒夫、外岡尚美、阪元留美（訳）(2005)『文化の場所　ポストコロニアリズムの位相』法政大学出版局
ミハイル・バフチン　伊東一郎（訳）(1996)『小説の言葉』平凡社
宮永國子（2000)『グローバル化とアイデンティティ』世界思想社
梁石日著　磯貝治良、黒古一夫（編）(2006)『梁石日』講談社
梁石日（1989)『族譜の果て』立風書房

引用・参考論文

李洙任（1999)「変わりつつある在日韓国・朝鮮人のエスニック・アイデンティティ」紀要 29 号 pp. 43-58　大阪女学院大学・短期大学
狩谷あゆみ（2000)「『在日である』/『在日をする』/『在日になる』―在日韓国朝鮮人の若者のアイデンティティについて―」広島修大論集. 人文編 41 号 pp. 197-217
黄奉模（2004)「在日韓国人文学―金城一紀「ＧＯ」を中心に―」千里山文學論集 第 72 号 p190-169 関西大学大学院 文学研究科
陳乃綺（2010)「在日朝鮮人と異文化間コミュニケーション―「由熙」と「除籍謄本」を通

じて―」千里山文學論集 第83号 p386-360 関西大学大学院 文学研究科
林浩二（2003）「『在日朝鮮人文学』とは何か―その史的展開から考える―」民主文学4月号 pp.83-99　日本民主主義文学会
細井綾女（2010）「『コリアン・ジャパニーズ』・『ブール』の呼称の変遷と国籍問題」言葉と文化11号 pp.81-98　名古屋大学大学院国際言語文化研究科 日本語言語文化専攻
ホミ・K・バーバ　本橋哲也（訳）（2004）「グローバリゼーションとマイノリティ文化」国際言語文化研究所紀要15巻4号 pp.219-231 立命館大学国際言語文化研究所
ポール・スミンキー（2002）「金城一紀の『GO』における在日アイデンティティー」鹿屋体育大学 学術研究紀要28号 pp.11-22

引用・参考ＵＲＬ

金城一紀インタビュー ロングバージョン
http://blog.mf-davinci.com/interview/bn/kaneshiro/frame.html
（最終アクセス日:2011/12/13）
ＷＥＢ 本の雑誌「作家の読書道 第6回 金城一紀」
http://www.webdoku.jp/rensai/sakka/michi06.html（最終アクセス日:2011/12/13）
日経トレンディネット　時代の仕掛け人 第45回「作家 梁石日に聞く（前編）」
http://trendy.nikkeibp.co.jp/lc/jidai/080717_yan1/
（最終アクセス日:2011/12/13）
日経トレンディネット　時代の仕掛け人 第45回「作家 梁石日に聞く（後編）」
http://trendy.nikkeibp.co.jp/lc/jidai/080722_yan2/
（最終アクセス日:2011/12/13）